

La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 281 18 aŭg. 2016

発行：名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニブル新栄301号
<http://nagoya-esperanto.a.la9.jp/index.html> <https://www.facebook.com/nagoja.esperanto>



磯部晶策さん逝く

磯部さんとの思い出はあまり多くはない。たぶん、磯部さんとふたりだけで会談したのは、中部国際空港でフランケーサ夫妻を見送った後に、食事を共にした時ぐらいかもしれない。したがって、わたしから垣間見た磯部さんの思い出として、興味深いことを書くことは、ここでは差し控え、かわりに、そのとき見送ったフランケーサ夫妻について書きたい。

写真の、磯部さんと山田さんに挟まれて座っているのが、スペインのフランケーサ夫
(8pへ続く)

磯部晶作さん逝く	猪飼吉計	1
竹崎睦子さん逝く	前田可一	2
竹崎さんさようなら	山田 義	3
L' Espero de Motteau.....		5
『エスペラント運動を考える』を読んで.....	山田 義	6
編集後記	猪飼吉計	8

竹崎睦子さん逝く

前田可一

通夜の話は彼女のお姉さんから聞きました。ご苦労様です。

私は葬式に出席しました。本当は愛子さんが出ればよいのですが断られたため彼女から偽善者は出席しなくてよいと罵られながらも恩讐の彼方にの心境で足を運びました。

出席者は家族関係以外はエスペラント関係の人だけでした。高木さん、大森さん、山本さん、後藤さん、黒柳さん御夫婦、江崎さん、梅村さん、私の8名でした。

彼女らしい最後といえば最後で、東海大会とともに逝去したことで彼女の思念のいくばくかは残せたのではないかと思います。

高木さんが彼女と同学年で竹崎さんは送られて死ぬるんだから死んだが勝ちよ私なんか・・・というようなことを言っていました。読経が終わりその後で高木さんの発声でエスペーロを全員で斉唱し家族からなよりの供物との言葉を受けました。

出棺を見送ったあとで大森さんのお誘いで高木さん、大森さん、山本さん、後藤さん、私の5名で葬儀場近くの喫茶店でひとしきり話込みました。大森さんは旦那さんが1週間前に亡くなったとのことでしたが足が弱っている以外は元気でした。高木さんからはエスペラントの物故者についての彼女目線でのいろいろな話があり高木劇場健在でした。後藤さんや山本さんは高木さんの話を聞き疲れた様子でしたが、竹崎さんの発見時の警察等とのやり取りを聞く事が出来ました。

また、竹崎さんのエスペラント関係の引継ぎについては追ってお姉さんのほうから後藤さんに連絡が入るとのことです。

大谷派では最後の南無阿弥陀仏は出席者全員で斉唱するのですね。合掌



竹崎さんさようなら

山田義

今年の東海エスペラント大会（6月4～5日）の会場で、準備、運営の彼女の到着を待っていた人たちが、なかなか来ないので名古屋市内にある独り住いを住所頼りに急遽訪ねたそうだ。110番で警察官に入ってもらおうと風呂場で倒れているとのこと。救急車はそのまま戻り、大会は進行したそうである。私は再三この大会に参加するよう彼女から連絡があったが断固拒んでいた。

大会二日目の夜に通夜があるそうだというその大会参加者からメールで知らされた。妻のシマ子も驚き、葬儀に行きたいと言っていたが、私一人で普段着で顔を出した。5人兄弟とその家族だけの通夜だった。世界救世教に関わっていたことを本人から聞いていたが、昼の部屋で葬儀を進めていた方は僧侶で親族のお一人だそうだ。

時々エスペラント大会などで見かけたことのある彼女のお姉さんが迎えてくれた。ベレー帽の似合うこの方が兄弟姉妹をそれぞれ紹介してくれた。50年来のエスペラント仲間だと話すと、わがままだったので迷惑をかけたはずだ、問題を起こしていたでしょう、とねぎらいを頂いた。私も兄弟の一人のような気分になり遺体の前に座った。

南無阿弥陀仏と木魚が終わったあと、そのお姉さんにそっと、エスペラントで歌いたいが、と言うと、僧侶の一人が立つて歌う場所を静かに示してくれた。彼女が生涯かけて愛したエスペラントをご兄弟たちにお聞かせしたかったからである。どうして La Espero を歌ったかという、15年ほど前、竹中治助さんの葬儀のとき彼女がこの歌を歌えというので汗しながら歌ったことがあるからである。今日は、あの軍隊行進曲のエスペーロ は遠慮して、Motteau の旋律。初期のUK で歌われたという落ち着いた気品のあるメロディーだ。歌い終わると拍手があり戸惑った。弟さんは、自分も少しはエスペラントをかじったことがある、この歌は力強いですね、と声をかけてくれた。妹さんにはどんな意味の歌かと聞かれ、おおまかに伝えた。

竹崎睦子（1940-2016）、50年来の友人である。頼まれて庭木の剪定に行ったことも何度かある。息子の寛人も呼ばれて古木を伐採しに行ったり枇杷の実を宅配してもらったりしている。妻のシマ子はモンペリエでの世界エスペラント大会後の一週間のフランス国内のバス旅行では、彼女のエスペラント力を期待して同室同行を許した。しかし、あまりのわがままに閉口しながらも、美術館ではその観賞力に敬意と親しみを認め、それ以来我が家ではむっちゃんと呼ぶようになった。

しかし、彼女の奔放なエスペラント運動に対する頑なな態度には周りは手を焼いた。私は当時そこに居合わせていなかったが、第何回かの東海エスペラント大会で彼女を巻き込んで大きな騒ぎが起き、その時の主催者であった名古屋エスペラントセンターでは、彼女を除名処分にしたという話があり時々聞かされてきた。

彼女は、先輩たちが 70年間もかけて育てて来た名古屋エスペラント会を存続させようと必死だった。例会や会報発行など私も協力した期間もあった。しかし、今は有名無実と言わざるを得ない。東海エスペラント連盟という名前にもこだわりを捨てようとしなかった。外の人まで巻き込んで長い間私たちは議論してきたが徒労に終わった。

どうして彼女は、先輩たちとも同輩とも喧嘩をしながら問題を起こしてまで、この地方のエスペラント運動に必死にしがみついていたのだろうか。彼女の夢見るエスペラントの普及の余りにも進まないことで苛立っていたのだろうか。しかし、彼女の口からは失望の言葉は聞いたことがない。彼女に失望した人はあったにしても。

最近彼女の息のかかった催しには私は手を引き、席を遠ざけるようにしていた。

解説。

竹崎さんは、1974年のセンターの発足時に、発起人として名を連ねたひとたちのひとりである。つまりセンターの設立者のひとりということになる。ご冥福を祈る。

山田さんが通夜の席上歌ったという La Espero は、現行の行進曲風の Menil 作曲のメロディーではなく、Motteau による作曲である。山田さんがその楽譜を提供してくださったので、下に楽譜を紹介しておく。

なお、La Espero は初期には、さまざまのメロディーで各エスペラント会で歌われていたが、もっとも古いメロディーのひとつに、Adelskold のものが有名である。

現在の Menil の曲は、世界大会の時に好評を博したため、定着しているが、公式の団体歌として制定には至っていないし、エスペラントには公式の団体歌というものは存在しない。(編集部)

L' Espero.

Himno de
DRO. ZAMENHOF.

Marŝa Muziko de
Esperantisto 6266.

En la mon-don ve-nis no-va sen-to, Tra la mon-do i-ras for-ta vo-ko

prokraste

Per flu-gi-loj de fa-ci-la ven-to Nun de lo-ko flu-gu ĝi al lo-ko!

Fino

Ne al gla-vo san-gon so-i-fan-ta Ĝi la ho-man ti-ras fa-mi-li-on;

malakcele

Al la mond' e-ter-ne mi-li-tan-ta Ĝi pro-me-sas sank-tan har-mo-ni-on.

D.K.

Achille MOTTEAU (1836 - 1906)

BELTONO 2016

『エスペラント運動を考える — La Movado 誌から —』を読んで

山田 義

177ページの横書き本。今年の関西大会の記念本。

峰芳隆編集。関西エスペラント連盟の機関誌 La Movado の記事から編集された7部構成。35名の日本のエスペラント界をリードする人たちの著作55編。執筆者の名前はどこかで会って話を聞いた人たちもあるし、すでに他界した懐かしい名前もある。もちろん名前と顔を思い出させない人もある。

名古屋の二人の記事に惹かれて読んだ。

伊藤俊彦さんが第3部「ザメンホフを読む」、山口真一さんが第1部「運動を考える」に出てくる。

La Movado は、65年前ガリ版刷りから始まった関西連盟の機関誌であり、丹羽正久さんが活躍のころ東海連盟の共同機関誌であった。その後、事情が重なって東海支局は消えた。私は続いて個人購読している。

うすぺっらい月刊紙だがよくぞここまで頑張ってきた。『エスペラント運動を考える』はこの機関誌から論文を拾い集めたものだ。見過ごして来た記事がこうして1冊の本になって一挙に読めてうれしい。30名以上の執筆者がそれぞれの文体で書いたもの。どれも読みやすい日本語だ。エスペラントを愛する人たちの心の内が一挙に伝わってくる。

竹内義一さんが1982年に「運動の後継者づくり」を書いている。運動について深く考えたり議論したことのない私だが、竹内さんとは2000年のテルアビブの世界大会で食事をしながら名古屋の活動にハッパをかけられ、エスペラントを利用して何かを楽しむだけでなく、エスペラントのために何かをしなくては、と決心させられたのがこの時であった。竹内さんとはであると書いているが、今の我々にその訴えは切迫している。

山口真一さんが2006年に書いている。エスペラント歴30年に当たる。エスペラントを知った当時は全国的に活発だったのは若いロンド・ハルモニニアの活動であったと、書いている。今は、仏教エスペランチストとしてのエスペラント運動を熱心に進めている人だ。同じ地方会で近くにいても運動についてのその人の思いを知る機会が少ないがこうして書かれたものを、今回この本によって読に知ることが出来た。

書かなきゃダメだと思う。こうして仲間たちが自身の経験や思いを La Movado という機関誌に書いてきたことが尊いと思う。竹内さんはどんな小さな活動でもいいから書いて機関誌に投稿せよ、報告してそれを記録しておくように、と言っていた。運動の記録だけにとどまらず、書くことによって考えをまとめることができる、後継者に伝えることができる。自分の活動や研究を人前でしゃべっただけでは、その場で終わってしまう。書いておけばその知恵や学問は後の者たちの役に立つ。

この本には、第2部「ザメンホフを考える」、第3部「ザメンホフを読む」があるが、伊藤俊彦さんの“La rabeno de Baharah”という1988年9月号の記事が載っている。

ドイツのユダヤ人ハイネの小説『バッハラッハのラビ』のザメンホフ訳を読んで紹介している。分かりにくいユダヤ人問題を作者ハイネと訳者ザメンホフを通し書いている。伊藤さんの書評にはいつもその小説の要約が書かれており、だいたいこんな内容なんだと知ることができる。背景にある世界史の知識や、作者や訳者の事情を交えて紹介している。伊藤さんは、何より芸術としての文学を楽しんでいる人のようだ。

第4部以降は、「平和を考える」「民際語を考える」「民際活動を考える」「言語を考える」である。日本の現代のエスペランチストがエスペラントのことをどう考えているのかを把握するための本だ。最後は1981年のサカモトジョージさんの常用漢字についての考えが載っている。エスペラント語を使う者にとっても国語というコトバの問題も大切な関心事であることが分かる。

そして、この280号を超えた「センター通信」でもいろいろな記事を抜粋編集してまとめておくことはできないだろうか。

『エスペラント運動を考える』というこの本の装丁についてだが、文字は大きめだ、当然ながら日本文のなかにローマ字が混じったページが多い、よく整っている。ただ、行の幅が狭くて窮屈さを感じる。限られた紙面を効率よくということだろうが。それに、ところどころ注が振ってあり、その上付き文字のせいで行間にばらつきがある。

こうした本が、日本だけではなく、各国のエスペランチストが寄せてまとめたものがあろう、読んでみたいと思った。

・・・・山田義

ZAMENHOFA FESTO 2016 ZAMENHOFA FESTO 2016 ZAMENHOFA FESTO

NECのザメンホフ祭は、
12月17日土曜日・センターにて

ZAMENHOFA FESTO 2016 ZAMENHOFA FESTO 2016 ZAMENHOFA FESTO



(1pからの続き)

妻は、磯部さんとは家族同様の付き合いとのことで、わたしは、自分の車で夫妻を案内させていただいた。

フランケーサ氏は、自動車部品（わたしの記憶違いで農機具の部品だったかもしれない）を扱う、会社を経営しているが、かなりのカーマニアという。したがって、磯部さんは、わたしに車でトヨタ博物館に夫妻を案内してくれ、ほかはどこにもよらなくていい、という。トヨタ博物館は、仕事の関係でその前をなんども車や電車で通り過ぎたから、場所は知っていたが、おとずれたことはなかった。エスペラント人を案内するために訪れることになろうとは思わなかった。

博物館では、ガイドをつけてもらった。英語ではなく日本語で解説してもらい、わたしがガイドエスペラントに通訳した。カーマニアのフランケーサ氏にとっては、一生の思い出になったに違いない。

博物館からの帰り道に、和食のファミリーレストランに案内した。夫妻は純和風の食事を洋食器を用いて食事した。

なお、フランケーサ氏は、お礼の印に革製の通帳入れを下さった。日本で世話になるエスペラント人に配るために、いくつも用意してきたものらしく、たぶん、一万円はしそうな高級な通帳入れである。

わたしは、通帳以外にも、運転免許証、パスポート、マイナンバーカード、健康保険証といった公的な身分証明書をすべて入れるなどして、重宝している。

IKAI Yosikazu

▶編集後記

センター通信の発行が遅れてしまいました。新任の編集委員として、編集のソフト pages に不慣れなこともあり、うまく編集が進みませんでした。結局、前任者の山田さんの助力を借り、発行にこぎつけました。お礼を言います。なお、当初の予定では、新入会員の自己紹介、総会の報告、青島さんの講演の報告も盛り込むつもりでしたが果たせませんでした。磯部晶策さんの訃報が舞い込んだので、直接磯部さんの話題ではないものの、取り急ぎ拙文を巻頭に付しました。猪飼。